書籍：「命のことば」を読んで

瀬戸内寂聴の著書「命のことば」を読み終えた。

仏典、釈尊、日蓮、法然、最澄、空海、一休、一茶、一遍、等々、仏教関係の言葉の意味、背景の解説が圧倒的に多いが、利休、子規、マザーテレサ、チャップリン、外国の詩人、哲学者、等々の言葉の意味、背景も解説している。

それにしても、どうしてこう歴史に名を残す人は、簡潔な言葉で、自らの想い、人生の神髄、人としてのあり方、等々を表現できるのだろうか？いつも不思議に思いながらも、感嘆、感心、感動、感服するばかり。

自分は日頃、TV、新聞等でも印象に残る言葉に接すると、忘れないようにと PC 上にメモ・ファイルを作っているが、いつの間にかメモしたことすら忘れる凡人。思い出したように年に何回か読み返しては、またまた、「ウ～ン」と唸って言葉の前に平伏するのみ……。

以前、薬師寺を訪ねた時、「奈良時代は、人の途（みち）を説く場がお寺であり、それ故に、奈良の昔からの有名な寺には墓地がない。」との説法を聞いたことがある。

今回もいくつか仏教教典の言葉に接したが、それらは正に哲学的意味を含んでいる。日本では、どうして、いつから「葬式仏教」になってしまったのだろうか。

今回、一番印象に残ったのは、第２５３世天台座主の故山田恵諦大僧正（1895 ～ 1994）の「人と人の間に生きているから『人間』」。

大僧正の自選著作集「山田恵諦の人生法話」（下）には、「人間社会の中で個人は生きている。生かされている。人と人との間にはさまってる仲間のひとりが自分であるという意識が人間性です。いじめの問題、自殺の問題、すべて人間が孤立化してしまい、複数の中で助け合うのが人間であることを忘れたところから起こってくる。」

これの寂聴尼の解説によれば、「仏教とは何であるかといえば、完成された人間になるということ。それが仏。仏になるために修行を続ける。仏教の根本教義はとは完成された人間になるということです。完成された個人よりも完成された人間を目指す。人と人との間に生きる社会的な人間としての完成こそが理想です。」

仏教云々はさておき、日頃学生に「『人間』とは、『人』と『人』の『間』と書く。『人』との双方向性、関係性を抜きにして自分育ちは出来ない。」と話しているだけに、この書籍から自信と勇気を与えられた。

（2005 年 11 月 28 日　記）